



15 特
6063
2

57-2492



きりし社

下



青葉此枝乃なまけり
あちらおしりや

形ふれ實かのみ
壇じんを

しるは

ほろりら

あそ

南人よき山津と引り遊入毒 如高

ヤトいよき次今二の松 蘭臺

ふく徳もく犀鷄九廿新すして 山夕

竈一し直法酒小家人とり 附要

三日月の空れわりのと砥多實 和風

毎朝の本をく厭けとてこと 發中

裡

赤鬚乃耳母富手お磨やうり 貞佐

と取金松くくふと展きると 棹歌

けさせら沖中川かるととりや次 白雲

神と祓くこの鷺女よ等する 沾洲

いほきちふ存けく辛にいつく白 執筆

小崎公乃くはきと度わく奇歌 如高

藤房おんまきくく風のやつつさ 蘭臺

おころりくけ梅のとくと雲れ 貞佐

月乃昏暗廻りてくると此の 附象
 おぼけくあつりにあゆむればとら 山夕
 夏夜虫のしるしの意の花の宿 沾洲
 又條と不念と承乃の明の 和風
 社所下の虹かゝりて川に 桑中
 文珠ははりとて平してとゆく 自言
 世の中此常籠りてあましくと 豫放
 狭間一月のしるしの入相 附象

名

馬脊鍔の乳香よかよと琵琶巻 如高
 他へへ解てと娘夷う輝 蘭臺
 子形よりうさの月をろ標しと 貞依
 毛身かきしゆくは二動破の上 沾例
 山猫は彼乃とあつとつりて 和風
 悟事とと忠とととと乃服 桑中
 深つる此菜のときととと物中と 山夕
 寝網中かたれ移るはら各 梓欣

ウ

尊榮とらへぬふられ居也 白雲

如意くありとも月夜を 如萬

萬國よきことうらま二回に 蘭臺

斯くまことあり勝後を 和風

旅の程と吹たしあり新を海を 沾洲

庭訓三月仍てやよ入 貞佐

しんさくまのうらま

あひのうらまのうらま

まのうらまのうらま

はのうらまのうらま

しのうらまのうらま

きのうらまのうらま

このうらまのうらま

愚問乃如...
里人...
...

長ゆる車... 素堂

梅... 專吟

梅... 岩翁

惟... 沼洲

素... 浮生

何... 格枝

程... 序令

愚... 千山

聖... 清流

金... 百里

海... 仙鶴

梅... 濟通

勝... 棹歌

折... 楓江

次... 初立

宇治勢田と他今ありても夜輪 海宇
昔の目と柳一ほりの梅はわ 三外
古事と志海いとも記していちの花 外堂肥加行
きくまの耳一りよふ梅もよ 伽中
緋ちのらん末又目よて暮る花 瓮中
いしき世の毒一取らるる小神 隣水
抱旅ともの一梅さく法同志 里雪
筆のちてみよまよむつ也梅う下 防水

いしきほけ地一うもふ梅の花 古邑
はん一好文よれりるれ 初中
献立一し懐とともれむれいあ 一澤

玉「瘦乃黄ば」ところ

楓のよや

さびたれあ

よのこ

かゝとせんま

いね

大武乃みのこ

あつ海

明かゝるる

真花乃袖と舞とせり梅お葉 立永

明花とわくは本花の寝る 蘭臺

二白利大くは月かゝるる 和風

廻快あれ八天くは形 味推

乃其花おすれぬ袖子古叢臺 乙中

よるとゝゝ場へ南京れ虫 執筆

裏

うちんも母がけし(松尾武敏) 蘭臺
 きてのちも病はくすも 立永
 月よの節らうれておと瑞 和雅
 世ハ神ハ徳セすくゆく 和風
 年ハ雨ハまうて悔ハ鶴馬強 立永
 桂乃けしらよ伯母世も免 乙中
 葛切ハ意ハらまうと緋ハ海ハ 和風
 推系ハ心ハと二千年来 蘭臺

余

釘ゆくじ唇うけく花中ハ舞 乙中
 太子堂ハ心ハきて海ハ心 和雅
 くらりすに心ハま何れハ月ハ隈 蘭臺
 伯樂ハ心ハあわよのやり心 立永
 雅波津ハ心ハあて心ハく喰ハ 和雅
 宿眼ハ心ハ腸ハ椿ハ花ハ舞 和風
 お路ハ心ハ回ハ病ハ心ハり節ハ後 立永
 く小ハ心ハまハ心ハりの心ハ楽 乙中

子らひて小極とくはま茶 和風
 将南ごんごり何り一乃院 蘭臺
 慇懃乳麻乃くくくく乙中
 信とくく海神職を鼻 和推
 鶴鶴もく未か産とつり封一糸 蘭臺
 ころれよすの月ひく流 立永
 健うまぬ常りちく公志うん 和推
 飛後よ妙後小胡芋川く 味風

け小此脈んぢうあく小栗梅社 立永
 攪うふはくく以後の大幣 蘭臺
 日ましく中流う茶園刑け小 乙中
 けすくくく乃發菩提心 和風
 加田浦のわよりぢうくむあや 味推
 こすすあめりてあよめあ 乙中

こゝね入慕うとこらふ

てゝまじの國なる

ぬら〜なり

暗〜探り出〜

春小〜代めら

とらひい

それい

振こあ〜ゆがれ梅うえねあ〜ば 白雲

鼻とむぬ〜非書すて端 蘭臺

三月月ら〜今さ〜ゆ大籠〜 立永

踏あ〜いぢら〜人角子旁 詞言

それ〜れ子不一流落〜 掉歌

椽は産〜り〜命ち〜いよ 又魚

裏

雛子乃判きくふれらば子 九皋

登るるをせし珠賣るる 白雲

ちろ相みゆりし層の倚子に寄 蘭臺

どよやうの明れ中し洞簫 立永

あひうらに塔出又あり旅芝居 詞言

まゝ雜りの括とまじくせ 九皋

下にとも形と括りすなの日 又魚

さかびりし深み鮭といぬかり 棕欵

うきやとむりし流るる乃蟻屋 白雲

鳥犀圓あもえまのすまむ 蘭臺

杵さけて布あしうし花の石 九皋

順乃鐵めてらふのわらう 詞言

やすけし四智園妙の梅さう 立永

あしりしにさか考考乃尻 又魚

鳩庵しあこ人日あさう 棕欵

ふちくは居て又塵と喧切 白雲

油火くくきく久つひの噴あてり 詞言

頭痛をかかぬおあはれ 立永

黄縷すん中くりり巫船八月 蘭臺

はくくそ湯くもれり入新 九阜

志も負ふく水くせや恨あり 又魚

塗筒板八月くそゆく癒 棹歌

善精好まやりとりつて云く 白雲

数くわけ切て花あやめ候 蘭臺

り

あく泳目しめすぬの澄ハ塊くろ 九阜

新店くましく尿流くせり 又魚

かんてくく刺のくそくまきま 立永

津軽八月のいぬめりて 詞言

清淨のく磔子腰言くまき 棹歌

物く海くりりく餅乃と 枕毫

かゝるらるる

をばく本ら

まうらに

まうら

まうら

あか海

言れ多は墻乃と好もや言の中 倫和

幸梅や言やう海を月とんう 東菊

一樹寒梅 白玉條

香を室 入道改常丸 桃翁

凡台に女目れ肌あひとそ乃梅 望月

葉園を海とまハ 子也霜の梅 柳洞

六十年好むと海を 子也霜の梅 柳洞

室あゝる魚ははくも梅の思 水陽

むらもや他とそ北去らぬ古も是 北郎
花一今室より母一三本物り也 月峰
那月れ如く程さくわくく冬も梅 西白

と一乃く此

無ととめきあはけけ梅の元 不角 漆橋

國乃いはく一とわつく徳そ
家れ同り校すもまにえい
子と勢の病乃あす丹かふふ
志はし一うめすう八百と物と
七う毎のけりりたど一あつく
やん言もやと後り一ひけて
月成文一これと縁め一ふま

姑射鴻毛

華壺

うしろ

桐人

いづれ

いそ

—

兼良此り人々也 曆中いひあふ 山々

上レ氷 鯉ハ五一身 加高

鶴子より今釣ハ傳馬丹塘にて 蘭臺

うぬれ月を柳かけけ 森中

菊一酒 香ノ招レ友 一隅

栗一餅 茸ノ饗レ賓 和風

ふらふらして帆くけてけりおの月 蘭臺

漁一村ノ市ハ上ノ旬トシカ 和風

切一匙ハ瓶一子ノ袖 棹歌

短一冊ハ老一妻ノ紳 如高

物のいふ東ハ船の中は初立

中れまゝの行ハ一いも縄 柳洞

澤一庵 勞ノ息ハ澤 和風

春一屋 吟ハ換ス春 棹歌

ウ

生草ともぬわりの新くまは 山夕

とり膳あゝ玉かまよひ 蘭臺

乱一心ノ残ハ髪ハ落 一隅

斜一目 奈シラ頭一振 附要

代と時と鯨乃大尾松むりて 桑中

厚一綿ハ西一國ノ民 如高

誰袖小引

一 日 乘 暖 墊 遊 爲 鷺 眼 扶 老
腰 鳩 杖 拄 瘦 手 踞 茶 店 睡 酒
肆 床 頭 山 攀 子 罵 予 黑 甜 久
矣 予 亦 呵 磬 子 云 姬 魚 語 女
木 母 汝 家 兄 也 非 天 下 花 魁
耶 芥 芳 入 鼻 攬 予 醉 夢 汝 花

身雖有色無香雪夫不白誰
 得賞之汝邈辭床去磬子賴
 面特稱家兄之事山也嶺也
 溪也野也林也里也園也庭
 也無地不相宜實依君子
 也雖弟不若兄堪寒堪暑四
 時不凋兄所不及也故類木

椿八千云予愕然而夢醒酒
 亦醒歸來在下 蘭臺君侍座
 臺君乃者輯百探詠句為集
 題以誰袖和風子清書之閑
 卷句玉吐言香飛无慮
 梅之精神也壽靜樓主人有
 後序棹歌老栢茶在傍請予

小引不及箱口 匣冠其首誌
瓦礫備老栢茶 笑因莞尔々々

晚節益

難波海古心
兔影少昔年
家友葉屋子偏
得袖梅影日向窗

躍不止仍僅存浮
 以結善人佳實也
 當之深与好者必出
 亦情言皆証諸也嗟

夫離路心已平
 福是心建於者决
 他身心亦我故諸張
 淨度百能亦何隨之

有人亦曰哉之出於

思所

辛卯之春應雷漫涉
毫於壽靜樓

如嵩同



吉田守自梓

